

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 小宮 仁

論 文 題 目

Prevalence and risk factors of constipation and pollakisuria among elderly home-care patients

(訪問診療を受けている高齢患者の便秘及び頻尿の頻度と  
リスクファクター)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

後藤百石 


名古屋大学教授

委員

岩井建志 


名古屋大学教授

委員

勝野雅央 

名古屋大学教授

指導教授

葛谷雅文 

## 論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

今回、訪問診療を受ける高齢患者を対象とした観察研究において、便秘及び頻尿の頻度とリスクファクターを調査した。便秘を患者の訴えに基づく訪問診療医の診断及び週に1回以上の緩下剤の使用、頻尿を昼間2時間以内または夜間5回以上の排尿と定義したところ、それぞれの頻度は56.9%と15.7%であった。便秘のリスクファクターは、Charlson Comorbidity Index 高値、ポリファーマシー、心疾患の不存在、頻尿であった。頻尿のリスクファクターは不眠と便秘であった。これらの結果から、医療者がこれらリスクファクターのある訪問診療を受ける患者に接するときは、便秘に注意を向けるべきであり、ポリファーマシーに介入することで便秘が改善する可能性があることが示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1.在宅高齢者の5~15%、施設入所者の30~80%が尿失禁を有するとの報告がある。Barthel index の排尿のスコアから、本研究において、尿失禁があつたり排尿に介助を要したりする者の割合は、およそ60%であった。訪問診療を受ける高齢者は、施設入所者と同様の割合で、排尿について介助を要する状況であった。訪問診療を受ける高齢者は、施設入所者と同程度に虚弱であることが考えられる。





2.高齢者の嚥下障害の頻度は母集団により異なるが、地域在住の場合は約15%、施設入所の場合は40%程度とされる。対象患者の嚥下機能は、Dysphagia Severity Scale (1から7)の平均スコアが、5.8であり、6未満(何らかの嚥下障害あり)の者が42%であった。そのことから、対象患者の嚥下障害の頻度は施設入所中の高齢者と類似する状況であった。

3.対象患者についてみると、便秘の患者53%に緩下剤が処方されており、頻尿の患者の17%に過活動膀胱治療薬としての抗コリン剤が処方されていた。つまり、便秘と頻尿に対する介入の割合は、便秘の方が大きかった。頻尿に対して投与されることが多い抗コリン剤は、高齢者の認知機能に影響を与える可能性があるため、高齢者に対して慎重に投与すべき薬剤とされていることがその理由として考えられる。しかしながら、近年は、ミラベグロンという抗コリン剤とは異なったメカニズムの過活動膀胱治療薬があり、頻尿に対する介入の状況も変化することが予想される。

本研究は、訪問診療を受ける高齢患者の便秘と頻尿について、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士(医学)の学位を授与するのに相応しい価値を有するものと評価した。

## 試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	小宮 仁
試験担当者	主査	後藤 百石 	副査 <sub>1</sub>	若井 建志 
	副査 <sub>2</sub>	勝野 雅央 	指導教授	葛谷 雅文 
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 尿失禁の頻度について</li><li>2. 嚥下障害の頻度について</li><li>3. 便秘と頻尿への処方について</li></ol> <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、地域在宅医療学・老年科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				